

園長です。親御さんは誰もが、子どもが明るく元気に育ち、将来も社会で幸せな人生を送ってほしいと願っているものです。そして、才能豊かに、周りから愛されつつ、世の中で信頼され活躍できるような人になってほしいと願われていると思います。



そのような人生を送るために必要なものの一つに「**幼児教育**」が重要視されています。ノーベル賞を受けた米シカゴ大学のジェームズ・ヘックマン教授は40年間の実態統計調査の末「**幼児教育を受けた者**」は「**受けなかった者**」より、年間所得、犯罪率の低さ、社会貢献度など様々な点で優れていると発表しました。そして、乳幼児期に育まれる「**非認知能力**」の重要性を指摘しています。「**非認知能力**」とは、IQ や読み書きなどの点数で表すことのできる認知能力ではなく、**やりきる力・粘り強さ・感情コントロール・コミュニケーション能力**などの測ることのできない能力のことであり、**社会で生きるためにとても大切な能力**です。

「**幼児教育**」は「**非認知能力**」が身に付き、後にも良い結果に繋がるということです。これは**脳の発達段階に則している教育**だからです。

人は生まれてから段階を踏みながら大人になっていきますが、乳幼児期には爆発的に脳の発達が進みます。**人間の脳は3歳までに80%、6歳までに90%が完成**します。生まれたときには約1000億個の脳神経細胞を持っていますが、細胞同士はほとんど繋がっていません。脳神経細胞同士を繋ぐのはシナプスという腕のようなもので**神経の回路**を作りながら1~3歳にかけて急激に増加した後、減少の傾向をみせていきます。シナプスの回路は、その時の**環境に影響**されながら太くなったり消えていったりするものなのです。

幼稚園に入るまでは、主にお家の人とのやり取りの中で神経回路がたくさんできている状況です。家族に**自分が大切に**されていれば**自我が安定**し、それを記憶し**他人を大切に**できたり、**人を愛**したりする回路の**基(心)**が形成されます。そして徐々に自己中心から周りの関係する物事も見えてきます。当たり前ですが世話を受けた人の影響を強く受けます。

幼稚園に入ると、お家の人との関係の他に、自分と**同年齢の子どもたちと集団**を作ります。自分と同じくらいのレベルの子たちと一緒にになるので、**園行事を通して**素直な競争や協調などの力が働き、**互いに刺激**をしながら成長していきます。例えば、年少ではおもちゃの取り合いなどを通して**友だちを知り、思いやりが芽生えたり相手の気持ち**を考えられるようになっていきます。年長になる頃には**クラス対抗のゲーム**などで**互いに協力して戦略を練って一致団結**する姿も見られます。



子どもたちの**小さな社会**の中で**軽いストレス**を感じていく事もありますが、これは「**非認知能力**」を身に付ける**大きなカギ**となります。**経験**の中で、人が嫌がることや、人が喜ぶこと、許せること、許せないことを探りながら自分の中で**境界線や距離感**が分かってきて**コミュニケーション能力**が磨かれています。つまり、**軽いストレスは人を成長させる**のです。(虐待などの大きなストレスは脳の回路が止まって発達も止まります)

菅幼稚園の教育方針は、「**明るく・くじけず・のびのびと やる気を育てる**」です。**ささいな事でも良い事ができたら褒めてあげます**。人は褒められると嬉しくなり次のステップを考えます。つまり「**やる気**」が出ます。その時の顔は「**明るく**」、褒められて**自信がある**ので「**くじけず**」、心に余裕が出て「**のびのびと**」、**元気な子**になります。本園の「**幼児教育**」とは、**やさしく・つよく生きていくための基をつくる教育**だと考えています。